

—（月刊「近代消防」論説委員）防災アドバイザー森田 武氏の調査報告から—

去る4月25日午前9時18分頃 J R 西日本尼崎駅北東約1キロ地点で起きた脱線事故は、死者107人、負傷者およそ550人の大惨事となり、大きな衝撃を与えました。

事故処理に当たった消防活動等については、さまざまなメディアを通じ報道・報告されておりますが、事故発生とほぼ同時に近隣の住民や事業所の従業員により多数の負傷者応急救護措置などが始められており、その状況を「近代消防」誌7月号に報告された森田氏の調査の中から近代消防社のご好意により転載させていただきました。

### 住民や近隣事業所の従業員などの救助・救急活動

この事故現場の管轄である尼崎市消防局は、午前9時22分に事故覚知し、緊急出動して同9時25分に先着消防隊が現場到着した。到着と同時に活動を開始したが、その時すでに近隣の住民や事業所の従業員により多数の負傷者の応急救護処置などが始められていたという。

現場で応急救護活動をされたという住民や事業所の従業員などに、その時の状況をうかがったが、住民や事業所の従業員などの活動概要は次のとおりである。

事故現場の近隣の住民や事業所の従業員などは、事故発生時の大きな音とともに事故を知り、現場へ駆けつけ救助や救護活動を実施した。

事故現場へは、消火器をはじめ救助に役立つバール・ジャッキ・クリッパーなどの器具、救急薬品、タオル、氷、あるいは水などを持って駆けつけ、列車から出て線路上や路上に倒れていた大勢の乗客の救護にあたるとともに線路西側では線路脇のフェンスを切断して線路内への通路を設定した。そこから、列車内に入り倒れている人のうち自分たちで救助可能な人を列車外へ救出するとともに、列車の座席をはずして列車外へ持ち出し担架代わりに使用して救護にあたった。

なお、座席などに挟まれているなどして、容易に救助できない人については消防救助隊に任せた。

事故現場では、多数の死傷者があり病院搬送されるまでに相当時間があつたため、その間負傷者の傷口をタオルで拭いたり氷で傷口を冷やしたりして救護にあたるとともに負傷者を激励したという。

一方、トラックやライトバンなどの車を現場へ搬出し、電車の座席を剥がし担架代わりにして乗客をトラックに収容して病院搬送した人は、「トラックは物を運ぶものであり、トラックで負傷者を運ぶことに躊躇したが、あまりの負傷者の多さに、到着している救急隊員に搬送の可否を確認した後、トラックへ多数の負傷者を収容し、救急隊員に同乗してもらって警察の白バイの先導で病院へ搬送した」という。

事業所の女性従業員の中には、負傷者の声を聞き取るなどして、負傷者の病状を救急隊員に伝えたりした人もいたという。

また、たまたま現場に居合わせた人々の中には、救助・救護等の活動に加わり応急処置をしたり負傷者を介護し励まし、中には負傷者を乗用車で病院へ搬送した人もいたということである。

これらの活動は、救助や応急処置、あるいは搬送だけではなく激励にまで及んでいて、多数の負傷者の救護に非常に役立ったものと考えられる。

なお、負傷者の救助・搬送などの活動を実施したという人に聞くと、「この事故現場では、市民と事業所の従業員などが、消防隊や警察隊と一体になって必死に活動していた」ということであるが、これは、この地域は阪神・淡路大震災で被災した家庭や事業所が多かったことから、震災を契機に住民や事業所が救助・救急・救護の重要性を認識していて、消防署などが行う応急処置や救命講習を受けていたことや家庭内や事業所内に応急薬品を置いていたところも多かったことから備えが出来ていた結果であると考えられる。

※ 尼崎市消防局では、これまでに市民や事業所の従業員を対象に、3万人を超える人々に応急処置や救命講習を実施してきたということであるが、同市の人口約45万人からすると、約15人に1人の割合で講習を受けていることになり、その成果がこのような形で表れたものと考えられる。